新吉は起き上つた。

此んな騒ぎになつては、決して眠れないと思つた。

火の手は燃え上つて、空を焦してゐるだらうか。

『何の邊だ』

『君はねてゐろ』

くらがりの校庭をつつきつて、尾上は走つて行つた。

新吉は晝間玉川から歩るいて來る途中、二人の巡査が、二重廻しを着た男を眞ん中にして、三人とも自動車で走つて來るのに出遇つた。

石油やうどんを賣つてゐる店屋で、强盜が此の頃村に出沒するので、其の嫌疑者なんだらうと言ふ風に人々が話してゐたのを思ひ出した。

尾上は間もなく歸つて來た。

ケロリとして言つた。

『放火なんだそうな』